

# シミュレーション教育を活用した 看護英語プログラム開発の試み

Developing a Nursing English Program Using Simulation-Based Learning

ポーター マシュー<sup>1)</sup> 吉川 由香里<sup>1)</sup> 藤野 ユリ子<sup>1)</sup> ウィア ケヴィン<sup>1)</sup>  
Mathew Porter Yukari Yoshikawa Yuriko Fujino Kevin Weir

## 要 旨

〔目的〕本報告では、看護教員と英語教員が連携し開発したシミュレーション教育を用いた看護英語プログラムの課題を明確にし、今後のプログラム開発への示唆を得ることを目的とする。

〔方法〕A看護大学2年生17名を対象に「English for Nursing II」において事前課題として市販のeラーニング学習と3場面のシミュレーション教育（日本語と英語）を実施した。その後プログラムに関する評価として①演習のデザイン、②学生の満足度と自信、③看護英語に対するプログラムの効果、④学習意欲、⑤自由記述のアンケート調査を実施し、分析した。

〔結果〕プログラムの演習デザインでは「サポート」「フィードバック/リフレクション」に関する評価が高く、学習における満足度と自信では、「自信」に関する評価が高かった。学習意欲に関する評価では、「注意」が高く「自信」に関する評価は低かった。自由記述では、教員間での「矛盾」や事前課題とプログラム内容の乖離に戸惑いを感じ、「難しい」と感じていた。しかし、シミュレーション教育の導入により「反復練習」ができ、「新鮮で楽しい」と評価しており、他の科目での「つながり」を実感していた。

〔考察〕今回開発したプログラムは、魅力ある教育環境と方法であったことがわかった。しかし、学生の看護英語に対する自己肯定感が低く、自信に繋がりがづらいこと、教員間の意見やアドバイスの矛盾やeラーニング教材とプログラム内容との乖離などが明らかとなった。今後は学生の自己肯定感の向上を目指すべくプログラムの評価指標を見直すこと、教員間の均一性を図り、プログラム内容に即したeラーニング教材を作成し、乖離をなくすことが必要である。

キーワード：看護英語教育、シミュレーション教育、カリキュラム開発

Keywords: English for nursing, simulation-based education, curriculum design

<sup>1)</sup> 福岡女学院看護大学

## I. はじめに

国際化が急速に進む中、日本の在留外国人や訪日外国人は急増しており（法務省, 2018）、医療機関では外国人患者受入れに関する環境整備が求められている（厚生労働省, 2018）。看護師は24時間、患者の状況を観察し、看護ケアを提供しなければならないため、在留外国人や訪日外国人との日常会話

と職業別の英語能力の両方に習熟する必要がある（Willeyら, 2016; 上林, 2016）。そのため、看護基礎教育課程において、学生が日常生活や看護の場面で英語を使う能力と自信を身につけるための看護英語カリキュラム構成が必要である。しかし、看護英語カリキュラムには、医学英語や歯学英語とは異なり、確立されたガイドラインがなく、看護英語を教えるための教材やアプローチは多様である。Porter (2018) が156私立大学における159看護英語のカリキュラム

を調査したところ、必修の英語科目のほぼすべてで、学生が専門分野で医療や看護について学ぶ前の1年次と2年次に位置づけられていることがわかった。また、その内容や形式も、専攻が混在する一般英語の授業から、臨床現場に特化した語彙や表現、ロールプレイを行う英語でのコミュニケーションが中心である授業まで様々であった。

カリキュラムの初期段階に設定された看護英語科目は、学生のレディネスが課題となっている。落合ら(2017)は、英語教員に対して、看護英語の内容と看護学の学習進度を同期させることの難しさを述べており、学生の学習進度と臨床現場で遭遇する状況の頻度や重要性の両方を考慮して教材を選択することを推奨している。またJohns & Dudley-Evans(1980)も、「職業目的の英語」は、英語教員が専門分野の教員と連携すべきだと述べている。この専門分野との連携により、英語教員が専門分野の授業内容や英語のニーズを理解し、英語と専門分野の授業内容を融合させる機会を創出できる。

一方、看護教育では、臨床現場を安全に再現し、反復的な実践、議論、振り返りを通して、専門的な知識や技術、態度を統合して実践力を向上させるシミュレーション教育が導入されている。2016年、A看護大学のシミュレーション教育センター開設に伴い、シミュレーション教育学領域が設置された。以来、全看護学領域でシミュレーション教育が導入されている。2019年度後期から開講された「English for Nursing II」では、シミュレーション教育学領域の看護教員2名と英語教員2名が横断的に看護英語プログラムの共同開発を行った(以後プログラム)。このプログラムでは、臨床場面をイメージしづらい低学年でも、英語の授業で臨床場面を再現し、シミュレーション教育を行うことで、より実践的な英語力向上に繋がる点で意義があると考えられる。

本稿では、開発したプログラムを試み、プログラム実施後にアンケート調査を行い、プログラムの評価・改善への示唆を得たので報告する。

## II. 看護英語プログラム概要

プログラムの概要は表1に示す。

## III. プログラム評価方法

### 1. 対象者

「English for Nursing II」を受講したA看護大学看護学部2年生17名。

### 2. 調査方法と内容

2019年1月の「English for Nursing II」最終評価試験直後に、プログラム評価に関する無記名自記式アンケート調査表を17名に配布し、2週間後までに回収ボックスへの投函を依頼した。評価項目は以下に示す。

#### 1) 演習のデザインに関する評価(20項目)

Jeffries(2006)/National League for Nursing(NLN)で開発された「Simulation Design Scale」の日本語版を開発した伊藤ら(2015)に許諾を取り使用した。この尺度は5要素20項目(「目的の理解/情報提示」「サポート」「問題解決過程の活用」「フィードバック/リフレクション」「忠実度」)から構成され、反映度と重要度の2側面から評価する。5件法「5:強く同意する」~「1:全く同意できない」で評価する。

#### 2) 学習における満足度と自信(13項目)

1)と同様にNLNで開発された「Student Satisfaction and Self-Confidence in Learning」の日本語版を開発した伊藤ら(2015)に使用許諾を得た。シミュレーション教育に関連した満足度と自信に関する13項目を5件法「5:強く同意する」~「1:全く同意できない」で評価する尺度である。

#### 3) 看護英語に対するプログラムの効果(4項目)

プログラムにより学生が認識した看護英語と学習法に対する効果に関して、研究者らが作成した4項目5件法「1:全くそう思わない~5:とてもそう思う」で評価した。

#### 4) 学習意欲に関する評価(17項目)

ARCSモデルから作られたARCS評価シートの日本語版を、開発した向後ら(1996)に許可を得て使用した。この尺度は学習意欲に影響する因子として

表 1 English for Nursing II プログラムの概要

項 目	内 容
科 目	English for Nursing II 1単位30時間(15コマ)のうち12コマ
学 習 目 標	①疾患をもつ患者に必要な対応ができる ②英語で患者の対応ができる
事 例	①肺炎を有する患者情報収集とケア ②股関節骨折患者術前指導 ③人工股関節全置換術後の退院指導
実 施 期 間	2019年度9月～2月
対 象 者	A看護大学の2年生17名
グ ル ー プ 構 成	4グループ(4～5名/グループ)
場 面 設 定	日勤帯の一般病棟の病室
実 施 場 所	A看護大学シミュレーション教育センター
事 前 学 習	事例① ・該当する事例の市販の日本語版eラーニング教材で自己学習 事例②および③ ・該当する事例の市販の日本語版eラーニング教材で自己学習 ・人工股関節全置換術のクリニカルパス(日本語)を参考に、術前指導および退院指導の説明内容を英語で考える。
プ ロ グ ラ ム 実 施 方 法	1事例につき4コマ(90分/コマ)で展開 1コマ目:患者の背景と内容をグループで確認 2コマ目:日本語で患者対応のシミュレーションを実施 3コマ目:市販の英語版eラーニング教材を参考に2コマ目の対応に必要な英語をトレーニング 4コマ目:英語で患者対応のシミュレーションを実施
2・4コマ(90分)の授業スケジュール	15分:本日の学習目標とスケジュールの確認 10分:グループワーク(生活様式について患者の知りたい情報を挙げてみよう) 40分:各グループより代表で1人が情報収集のシミュレーション(5分) デブリーフィング 20分:各グループより代表で1人が患者指導のシミュレーション(5分) 5分:まとめ

「注意: Attention」「関連性: Relevance」「自信: Confidence」「満足: Satisfaction」の4因子からなり17項目5件法「1:当てはまらない～5:強く同意する」の尺度である。

### 5) 自由記述(2問)

以下の内容に関する自由記述2項目を設定した。

- (1)「英語とシミュレーションを組み合わせた授業の感想や意見を教えてください」
- (2)「英語でシミュレーションしたことは今後活かせると思いますか?」

### 3. 分析方法

各調査項目の記述統計を行い分析した。自由記述は、内容の類似性に沿って帰納的に分析した。

### 4. 倫理的配慮

福岡女学院看護大学倫理委員会で承認を得て実施した(第19-10)。調査にあたり、最終授業の際に全学生に対して研究の主旨、目的、調査方法、研究期間、個人データの取り扱いや研究参加の自由意思の尊重と不参加でも不利益のないことを口頭で説明し、アンケート調査表の提出をもって研究参加の同意を確認した。

### IV. 結果

対象者17名のうち、同意を得られた11名(回収率64.7%)全てを分析対象とした。

#### 1. 演習のデザインに関する評価

表2に演習のデザインに関する評価の平均値を示す。最も得点の高い項目は「フィードバック/リフ

**表 2** 演習のデザインに関する評価

要素	項目	平均	標準偏差	平均	標準偏差
目的の理解 / 情報提示	演習の開始時点で、その目的についての十分な情報が提示され、やる気を起こしてくれた	3.73	0.75	3.74	0.78
	この演習の意図や目的について、はっきりと理解できた	4.09	0.89		
	この演習によって明確な情報が十分に得られ、与えられた状況に対する問題解決ができた	3.55	0.89		
	この演習の間、十分な情報が与えられた	3.70	0.46		
サポート	指示が適切で、私の理解を助けるようになっていた	3.60	0.66	4.05	0.67
	タイムリーに、サポートが行われた	3.74	0.78		
	支援が必要な時、それに対して対応してもらえた	3.80	0.75		
	演習の間、教員の支援にサポートされているという実感をもてた	4.20	0.60		
問題解決過程の活用	学習プロセス全てを通して、サポートを受けた	4.10	0.70	3.56	0.89
	自力での問題解決が促された	3.60	0.66		
	この演習での可能性のすべてを探ってみよう、という気持ちになった	3.00	0.89		
	この演習は、自分の知識や技術のレベルに合致するように設計されていた	3.55	0.89		
フィードバック / リフレクション	この演習で私は、看護のアセスメントやケアに優先順位をつける機会を与えられた	4.00	0.85	4.11	0.72
	この演習では私は、自分の担当する患者さんのための目標を設定する機会を与えられた	3.60	0.80		
	建設的な振り返りがあった	4.10	0.70		
	タイムリーに、振り返りを受けた	4.27	0.62		
忠実度	この演習で私は、自分自身の行動様式や行為を分析することができた	3.82	0.94	3.73	0.86
	この演習の後で、教員からガイダンスや振り返りを受ける機会があり、それにより知識のレベルをさらに高めることができた	4.27	0.45		
	演習のシナリオは、実際の状況をよく反映していた	3.82	0.57		
	演習のシナリオには、現実の各種要因や状況、変数（検査値）などが取り入れられていた	3.64	1.07		

**表 3** 学習における満足度と自信

因子	項目	平均	標準偏差	平均	標準偏差
満足	この演習での指導方法は効果的で役に立った	3.91	0.67	3.82	0.08
	この演習で得た各種の学習教材や活動で、基本的な看護援助における学習がしやすくなった	3.91	0.67		
	担当教員が演習を進めるやり方は、楽しかった	4.00	0.74		
	この演習で使用した教材は、学ぶ気にさせ、学習の役に立った	3.64	0.88		
	担当教員が演習で指導した方法は、私の学習方法に適していた	3.64	0.77		
自信	担当教員が私に示した演習活動の内容を、十分に習得しているという自信がある	3.27	0.75	3.93	0.79
	演習は、基礎的な援助技術を習得するために欠かせない、重要な内容を取り扱っていたと確信している	3.91	0.79		
	この演習から、臨床の現場で必要な仕事を行う上で求められる知識やスキルを、確実に得られていると思う	3.73	0.86		
	担当教員はこの演習の指導で、役に立つ教材を活用していた	3.91	1.00		
	この演習で学ぶべきことを学ぶのは、学生としての私の責任だ	4.30	0.64		
	この演習で取り上げられた考えが理解できない場合、どこに支援を求めればよいのかを知っている	4.30	0.46		
こうした技術の重要な側面を学ぶ上で、演習をどう利用すればよいのか理解している	4.00	0.63			
	この演習の内容から何を学ぶべきなのかを理解している	4.09	0.51		

表 4 看護英語に対するプログラムの効果

項目	平均	標準偏差	平均	標準偏差
私はシミュレーションを用いた英語の授業により患者と英語で話す自信がついた	2.91	1.16	3.82	0.08
私はシミュレーションを用いた英語の授業により患者と英語で話す不安が少なくなった	3.45	1.23		
私はシミュレーションを用いた英語の授業により看護職に必要な英語が身についた	3.45	0.08		
私はシミュレーションを用いた英語の授業は楽しい英語の勉強法だと思う	4.00	0.95		

表 5 学習意欲に関する評価

因子	項目	平均	標準偏差	平均	標準偏差
注 意	新鮮な	4.73	0.45	4.36	0.68
	好奇心を注ぐ	4.00	0.60		
	変化に富んだ	4.64	0.48		
	おもしろい	4.09	0.79		
関連性	親近感が持てた	3.73	0.62	3.79	0.83
	自発的な	3.90	1.14		
	プロセスが楽しめた	3.80	0.75		
	やりがいがあった	3.73	0.75		
自 信	目標がはっきりした	3.63	0.98	3.35	1.00
	着実な	3.40	1.11		
	自分でコントロールできる	3.45	0.89		
	自信がついた	3.18	1.03		
満 足	身についた	3.64	0.64	3.80	1.00
	素直に喜べた	3.64	1.15		
	評価が公平な	4.10	0.83		
	満足できた	3.82	0.94		
	楽しめた	3.82	1.27		

レクション」の「タイムリーに、振り返りを受けた (4.27±.62)」、「この演習の後で、教員からガイダンスや振り返りを受ける機会があり、それにより知識のレベルをさらに高めることができた (4.27±.45)」であり、次いで「サポート」の「演習の間、教員の支援にサポートされているという実感をもてた (4.20±.60)」であった。「サポート」と「フィードバック/リフレクション」の要素は、他の要素よりもやや高く、「問題解決過程の活用」の要素が最も低かった。

## 2. 学習における満足度と自信

表3に学習の満足度と自信の平均値を示す。満足度で最も高い項目は「担当教員が演習を進めるやり方は、楽しかった (4.00±.74)」であった。自信では、

「この演習で取り上げられた考えが理解できない場合、どこに支援を求めればよいのかを知っている (4.30±.46)」および「この演習で学ぶべきことを学ぶのは学生としての私の責任だ (4.30±.64)」の項目が最も高かった。一方、自信の「担当教員が私に示した演習活動の内容を、十分に習得しているという自信がある (3.27±.75)」の項目が最も低かった。

## 3. 看護英語に対するプログラムの効果

表4に看護英語に対するプログラムの効果に関する平均値を示す。最も高い項目は「私はシミュレーションを用いた英語の授業は楽しい英語の勉強法だと思う (4.00±.95)」であり、最も低い項目は「私はシミュレーションを用いた英語の授業により患者と英語で話す自信がついた (2.91±1.16)」であった。

表 6 シミュレーションを用いた英語の授業に関する自由記述の内容

質問	カテゴリー	コード	
英語とシミュレーションの組み合わせについて	反復練習	回数を重ねるごとに、この部分に関しては改善出来ていたので、よかったと思う。 最初のシミュレーションでは何を勉強しているのかよく分からなかったが、回数を重ねるうちに、英語で演習を行うことが少しずつ楽しくなった。	
	新鮮で楽しい	新鮮で楽しかった。 他の教科にはない教材を用いた授業で、とても新鮮でした。 とても楽しく学んでいると思う。	
	矛盾	英語については先生間での意見の違い、分かりにくかったので、アメリカ英語に統一していただきたいです シミュレーションの看護教員 A・B、英語教員 A・B、2つの科目の先生で言うことが違うことがよくあったので少し困った。 また、PC上と実際にする事がかなり違って残っていたため、PC上でやる必要性があまり感じ取ることができなかった。 また、臨床の現場では実際にはこのように行うというような方法は理解しているが、パソコン上でのシミュレーションと異なっていたりと、何を一番活用すべきなのかが最初はわからなかった。	
	難しい	英語で話すのは難しかった 日本語でシミュレーションを行うことはできるが、英語でのシミュレーションは非常に難しいのでポイントをより絞って行うべきであると思う。 日本語の状態であまり理解できていないまま、英語のシミュレーションに移行している感じがした。	
	つながり	日本語のシミュレーションは他の講義にも役立った。 基礎看護学やヒューマンケアリング論で行った看護技術でも良いと思った。(左変形性股関節症とかではなく)	
	今後活かせる	活用できない	同じ事例の患者じゃないと使えない 現場に出た際実践できないと思いました 今後、英語を話し続けなければ活かすのは難しいと思う
		活用できる	実習の時に今回の経験を活用できると感じる。 就職した時に生かせたらいいなと思う。 実際に病院で働いた際に必ず役に立つと感じることができた。 シミュレーション自体は、患者さんと話すうえで非常に参考になると思う。 座学よりは圧倒的に生かせると思う 今後の学習に結びつけていきたいです

#### 4. 学習意欲に関する評価

表5に学習意欲に関する評価の平均値を示す。最も高い因子は「注意 (4.36 ± .68)」で「新鮮な (4.73 ± .45)」の項目であった。最も低い因子は「自信 (3.35 ± 1.00)」で、「自信がついた (3.18 ± 1.03)」の項目であった。

#### 5. シミュレーションを用いた英語の授業に関する自由記述の内容

表6にシミュレーションを用いた英語の授業に関する自由記述の内容を示す。

「英語とシミュレーションを組み合わせさせた授業の感想や意見を教えてください」の問いに対する回答から21コード、「反復練習」「新鮮で楽しい」「矛盾」「難しい」「つながり」の5カテゴリーが抽出された。

また、「英語でシミュレーションしたことは今後活かせると思いますか？」の問いに対する回答から27コード、「活用できる」と「活用できない」の2カテゴリーが抽出された。

#### V. 考察

##### 1. 魅力ある教育環境と方法

学習における満足度と自信において、「担当教員が演習を進めるやり方は、楽しかった」の項目が高く、学習意欲に関する評価では、[注意]が他の因子よりも高く、その中でも[新鮮な]の項目が最も高得点であった。

自由記述においても「新鮮で楽しい」とカテゴリーが挙げられている。これは、机上での授業ではなく、

看護教員と英語教員が協力してシナリオを準備し、シミュレーターを用いたシミュレーション教育を複数回実施していることが、学生にとって臨床場面がイメージでき、「注意」の引く「新鮮」で魅力ある教育環境であったと考える。また、演習のデザインに関する評価や学習における満足度と自信においては、教員のサポートやフィードバックに対する評価が高かった。これは、このプログラムが少人数制で構成されていたため、シミュレーションの各段階で学生が、教員のフィードバックを受けやすく、サポートされていることを実感できていたことが窺えた。

今回対象となった看護大学2年生は、実習経験も少なく、臨床場면을イメージすることが難しい状況であった。しかし、学生の自由記述によると、日本語のシミュレーションと事例でのクリティカルパス活用により、臨床現場がイメージできたこと、看護師と患者の必要なコミュニケーションがより明確にでき、他の科目とも「つながり」を感じ役立っていたことがわかった。

## 2. 看護英語に対する自信について

学習意欲に関する評価において、「自信」因子の項目はいずれも低く、看護英語に対するプログラムの効果においても「私はシミュレーションを用いた英語の授業により患者と英語で話す自信がついた」の項目も低かった。また、自由記述より「英語で話すのは難しかった」「英語でのシミュレーションは非常に難しい」「英語を話し続けなければ活かすのは難しい」との意見がみられている。平野ら(2015)は、外国人の模擬患者を使用した際、一部の学生の自信の向上が見られず、外国人患者へのケアに自信を持つために外国人模擬患者のトレーニングとデブリーフィングセッションの必要性を感じたと述べている。落合ら(2017)は、学生の英語力ではなく、看護師としてのコミュニケーション能力や態度の向上に焦点を当てることで、学生の自信を高めることに成功したと述べている。

日本の学生は英語教育との関係が複雑で、何年も英語を学んでも会話ができるようにならないことが多いのが現状である。Edwards(2012)は、英語を学んでいる日本の大学生100人は、日本語を学んでいるカリフォルニアの学生100人よりも英語の

学習時間が2倍であるにもかかわらず、自信がないことを明らかにしている。これは、英語への関心の低さと能力の自己評価の低さに起因しているとし、英語教員は学生自らの英語力に対する自己肯定感を向上させるよう支援する必要がある。看護英語の場合、落合らが示唆したように、評価指標を英語力から看護コミュニケーションスキルへと焦点を移すことで、学生は達成可能な明確な目標を持ち、完璧な文法を使うことよりも、目の前の外国人患者と対話することが重要であると理解することができると考える。

自由記述では、「反復練習」のカテゴリーより、シミュレーション教育の回数を重ねるごとに会話力の向上や学習意欲の向上を学生が感じていたことがわかる。したがって、できるだけ多くの学生が繰り返しシミュレーションできるようなプログラム構成も学生の自己肯定感向上に繋がることが予測される。

## 3. プログラム内での矛盾

自由記述における「矛盾」のカテゴリーでは「教員間の矛盾」と「eラーニング教材とプログラム内容の矛盾」が挙げられた。

### 1) 教員間の矛盾

今回のプログラムでは看護教員および英語教員4人が関与した。プログラムではシナリオデザインシートを看護教員と英語教員間で共有し連携を図ること、クリティカルパス等の明確なツールを使うことで相違は生じなかった。しかし、英語に関しては英語教員の母国語が異なることから、英語教員からの意見やアドバイスの異なりを指摘されていた。したがって、今後はできるだけ英語教員間での均一性を図り、矛盾が生じないように努める必要がある。

### 2) eラーニング教材とプログラム内容の矛盾

今回、事前課題で活用した市販のeラーニング教材とプログラム内での医療・看護情報が異なっていたことが指摘された。今回活用したeラーニング教材の事例は、海外の病院に入院している患者に対する看護師の対応であったが、プログラムでは日本における外国人患者の対応であり、内容に乖離が生じていた。したがって、プログラムの事例に沿ったe

ラーニング教材が求められる。

また、活用した市販の英語版eラーニング教材では専門用語が多く使われており、看護師として患者にわかりやすく説明する内容ではなかった。

今後、プログラム内容に沿った患者への対応場面で必要とされるコミュニケーションが、看護英語で表現されたeラーニング教材を看護教員の協力を得て作成し、事前・事後課題で活用できるようにする。また、落合ら(2017)が述べているように学生が遭遇する可能性の高い身近な症例で学ぶことも重要である。よって次期開講する科目でのシミュレーション教育の事例は、現在の在日外国人患者の出身地、在留資格、年齢、主訴などのデータを参考に、作成している。

## VI. おわりに

今回、看護教員と英語教員が連携し開発したプログラムは、プログラム後のアンケート調査結果より、魅力ある教育環境と方法であったことがわかった。しかし、学生の看護英語に対する自己肯定感が低く、自信に繋がりにくいこと、教員間の意見やアドバイスの矛盾やeラーニング教材とプログラム内容との乖離などが明らかとなった。したがって、学生の自己肯定感の向上を目指すべくプログラムの評価指標を見直すこと、教員間の均一性を図り、プログラム内容に即したeラーニング教材を作成し、乖離をなくすことが必要である。そして、今後も看護教員と英語教員が連携し、外国人患者に必要な看護ケアが提供できるよう、学生の看護英語力向上を目指す。

## VII. 謝辞

福岡女学院2019年度活性化助成金(ポーター マシュー)のご支援により開発できましたことを心より感謝申し上げます。調査にご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用 / 参考文献

- Dudley-Evans, T. & St. John, M. J. (1980). *Developments in ESP: A multidisciplinary Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Edwards, M. (2012). *Japanese English Language Learners: Deficiency in Confidence*. 国際経営・文化研究, 16 (2), 57-65.
- 平野美津子, 篠寄恵美子, 小野五月. (2015). 看護学生による英語を使った外国人模擬患者参加型授業の振り返り. 日本看護研究学会雑誌, 38 (3), 184.
- 法務省. (2018). 平成30年末現在における在留外国人人数について. 2020-09-15.  
[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00081.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html)
- 伊藤朗子, 富澤理恵, 山本直美, 他. (2015). シミュレーション教育を用いた基礎看護技術演習の評価. 千里金蘭大学紀要, 12, 51-59.
- Jeffries, P. R. & Rizzolo, M. A. (2006). *Designing and implementing models for the innovative use of simulation to teach nursing care of ill Adults and children: A national, multi-site, multi-method study*. National League for Nursing and Laerdal Medical, New York.
- 向後千春, 杉本圭優. (1996). ARCSモデルに基づくCAI教材の評価項目の試作. 第21回全国大会教育システム情報学会論文集, 225-228.
- 厚生労働省. (2018). 外国人患者受入れ体制に関する厚生労働省の取組みについて. 2021-09-08.  
[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kenkouiryou/kokusaitenkai/gaikokujin\\_wg\\_dai1/sankou3.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kenkouiryou/kokusaitenkai/gaikokujin_wg_dai1/sankou3.pdf)
- 落合亮太, 松本裕, 大河内彩子, 他. (2017). 看護大学1年生を対象とした看護英語教育プログラムに関する実践報告. 横浜看護学雑誌, 10 (1), 29-35.
- Porter, M. (2018). *An overview of nursing English curricula at private universities in Japan*. Nursing English Nexus, 2 (2), 22-30.
- 上林千佳, 近藤暁子, 小泉麻美, 他. (2020). 大学病院と総合病院における外国人患者対応研修に関する看護師のニーズおよび参加意欲. 国際保健医



療, 35 (1), 27-38.

Willey, I. D., McCrohan, G. M., 西屋克己, 他. (2016).

The English needs of doctors and nurses at hospitals in rural Japan. *Journal of Medical English Education*, 15 (3) , 99-104.

